

旅するモダニスト詩人 W. H. Auden と大英帝国の衰退

Letters from Iceland における大衆文化表象の中の Lord Byron

藤田 萌々子

アイスランドとイギリスを繋ぐロマン派詩人バイロン

スペイン内戦が勃発した 1936 年、イギリス詩人 W. H. オーデン (1907-73) は作家仲間であるルイ・マクニースとともにアイスランドを旅行していた。その経験をもとに執筆されたのが、書簡体旅行記 *Letters from Iceland* (『アイスランドからの手紙』1937) である。1930 年代当時、アイスランドは J.R.R. トールキンなどの作家たちから北欧神話揺籃の地として注目されていたのみならず、ロード・ダフエリンによるアイスランド旅行記 *Letters from High Latitudes* (1856) が 20 世紀に入ってからも重版を記録するなど、一般読者の関心も集めていた。さらに、ナチスドイツが、アイスランド国民が圧倒的に白人種であったことから、アーリア人の文化的かつ人種的なルーツをアイスランドに見出そうとしていたことをオーデン自身も指摘している (*Letters from Iceland* 265)。

『アイスランドからの手紙』はオーデンとマクニースが各々の友人たちに宛てた書簡を中心としたという体裁の旅行記である。その中に、ロマン派詩人バイロンへ宛てた書簡という体裁で書かれた「バイロンへの手紙」と題した全 5 編にわたる長編の書簡詩が収録されている。オーデンは、バイロンを宛先として選んだ契機について “He’s the right person I think, because he was a townee, a European, and disliked Wordsworth and that kind of approach to nature, and I find that very sympathetic” (280) と述べたうえで、手紙の内容については、アイスランドに関連するものではなく “rather a description of an effect of travelling in distant places which is to make one reflect on one’s past and one’s culture from the outside. But it will form a central thread on which I shall hang other letters to different people more directly about Iceland” (280) と述べている。実際に「バイロンへの手紙」は、“a central thread”として『アイスランドからの手紙』の各書簡を結び合わせるのみならず、アイスランド旅行記という書物の形式と 1930 年代のイギリス情勢という主題をも結び合わせているといえる。本発表では、バイロンを受取人として登場させることで、オーデンが 1936 年のイギリス社会をいかに描いたのか、文学的枠組みと内容の両面から検討した。

モダニズム文学における「距離」—Light verse で書簡詩を書くオーデン

『アイスランドからの手紙』の書簡体旅行記という文学的枠組みに注目すると、オーデンがモダニズム文学における距離に関する問題を提起していたことが分かる。第一次世界大戦終戦後に海外旅行が解禁されて以来、イギリスでは海外旅行記が多数出版されたが、1929 年の世界恐慌後はイギリスの現状や課題を記録する国内旅行記が執筆されるようになる。他方でオーデンはアイスランドから地理的距離を置いて同時代のイギリスを観察する。さらに、同時代の友人ではなくバイロンを受取人にすることでバイロンが生きていた 19 世紀からの時間的距離をも演出し、1930 年代のモダニティを提示しながら同時代のイギリスを語るのである。

書簡というコミュニケーションツール自体も 1930 年代には人々の物理的距離を超越するものになっていた。オーデンが制作に携わったドキュメンタリー映画 *Night Mail* (1936) では、夜行郵便列車で働く人々の映像とベンジャミン・ブリテンの音楽に合わせてオーデンが書いた詩 “Night Mail” がテンポよく朗読され、機械文明のスピード感が強調された。20 世紀における書簡は個々人の距離感に対する意識を揺り動かすメディアであった。

さらに、Light verse という詩形を用いることで、詩人と読者の距離という問題にも焦点を当てる。オーデンは、自ら編纂を手掛けた *Oxford Book of Light Verse* (1938) というアンソロジーの序文において、Light verse を (1) 口承詩、(2) 詩人が一市民としての視点から日常生活について書いた詩、(3) ナンセンス詩の 3 つに分類している (“Introduction to *The Oxford Book of Light Verse*” 431)。オーデンはバイロンを (2) の定義に分類し、バイロンを “the first writer of light verse in the modern sense. . . . However much they tried to reject each other, he was a member of Society, and his poetry is the result of his membership” (“Introduction” 435) と評価している。オーデンは、単にバイロン作品の完成度や技術力ではなく、大衆からも広く読まれ、同時代社会に密着した作家であったことを評価しているのである。

他方で、オーデンはモダニズム文学において Light verse が “under a sad weather: / Except by Milne and persons of that kind / She’s treated as demode altogether” (*Letters* 183) であると、正当な評価を受けていないことを憂いている。難解さを売り物にするモダニズム第一世代のエリート主義的な詩作は、読者の距離の密接さを前提とする Light verse 作品とは相いれないものであった。オーデンは、モダニズム第一世代詩人たちが大衆と社会との接点を失いつつあるという現状を認識した上で、あえて Light verse での詩作品に挑戦するのである。ここには、ロマン主義第一世代との違いを強調して新境地を切り拓いたバイロンに自らを重ね合わせながら、モダニズム第一世代との差異化を図るオーデンの戦略が見て取れる。以上のように、受取人としてのバイロンの存在はオーデンのモダニズム文

学における距離に対する問題意識を結ぶ“a central thread”として作用しているといえる。

オーデンがバイロンに伝える現状—大英帝国の衰退と大衆文化の勃興

では「バイロンへの手紙」の中でオーデンは同時代のイギリスをどのように語っているのだろうか。まず、オーデンは“Britannia’s lost prestige and cash and power” (*Letters* 214) と大英帝国の衰退を端的に述べる。そのうえで、“I can’t imagine what the Duke of Wellington / Would say about the music of Duke Ellington” (214) と、バイロンと同時代を生きたナポレオン戦争の英雄 Duke of Wellington と、1930年代にニューヨークで大活躍していたジャズ・ミュージシャン Duke Ellington で韻を踏んでいる。Wellington の名前を Duke of Wellington に入れ替えることによって、大英帝国が衰退した1930年代イギリス社会において社会を席卷したのは大衆文化とアメリカナイゼーションの波であるという現状をわずかに二行で突きつけている。

さらに、大衆は作品を消費するだけでなく作品の評価を左右するようになったという現状を指摘している。オーデンはモダニスト第一世代の作家たちの名前をあげながら、“Joyces are firm and there there’s nothing new. / Eliots have hardened just a point or two” (212) と株価の値動きを示す言い回しを使いながら作家たちの評判を述べている。バイロンは *English Bards and Scotch Reviewers* (1809) や *Don Juan* (1819-24) において当時の作家や批評家への痛烈な批判を展開しているのに対し、オーデンは自身の文学批評を展開するのではなく、大衆からの人気文化の価値を上下させるようになった現代資本主義社会の姿を淡々と伝えている。バイロンの作品を想起させながらも、オーデンは1936年イギリスにおける大英帝国の衰退と大衆文化の勃興を語っているのである。

オーデンがバイロンに伝える展望—大衆が求めるヒーローとファシズム／反ファシズム

『アイスランドからの手紙』の随所でオーデンはたびたびスペイン内戦について言及している。オーデンは特にイギリスにおいてもファシズムと反ファシズムの間で大衆が衝突していたことに注目しながらイギリスの展望を語る。オーデンは、大衆心理を描くにあたってバイロンが生きていた社会を“*You lived and moved among the best society / And so could introduce your hero to it / Without the slightest tremor of anxiety*” (211) としたうえで、1930年代の社会については“*He [Byron’s hero]’d find our day more difficult than yours / For Industry has mixed the social drawers*” (211) と述べる。1930年代の社会においてはバイロニックヒーローのように文学市場を席卷するヒーローの登場が困難になったことを指摘しつつも、大衆たちがヒーローの存在を渴望していることを意識しており、バイロニックヒーロー的な人物像についてはバイロン本人に対して、“*Suggestions have been made that the Teutonic / Fuhrer-Prinzip would have appealed to you / As being the true heir to the Byronic*” (214) と述べ、アドルフ・ヒトラーの姿に大胆に重ねている。その背景には、1930年代におけるロマン主義受容が関連している。『アイスランドからの手紙』の参考文献として挙げられている書籍の一冊として挙げられている (207)、F. L. ルーカスによるロマン主義文学の研究書 *Decline and Fall of the Romantic Ideal* (1936) では、超越的なものを理想化するロマン主義的精神は、ともすれば暴力の行使や排他的な思想も正当化しかねないと指摘している。オーデンはさらに “[*Suggestions has been made*] *That you would, hearing honest Oswald’s call, / Be gleichgeschaltet in the Albert Hall. // ‘Lord Byron at the head of his storm-troopers!’*” (214) と、ファシスト支持者に称揚されるバイロンの姿さえ想像する。引用箇所と言及されているオズワルド・モズリーが率いるイギリス・ファシスト同盟は、たびたび反ファシスト勢力との暴力沙汰を起こしていた。1936年の段階で、イギリスにおいてもファシズムとそれに対抗する勢力との戦いがすでに始まっていたことを指摘している。

「バイロンへの手紙」は、オーデンがイギリスに帰国した後に執筆したパート5で完結する。そこでは、“*Rumours of War, the B.B.C. confirming ‘em, / The prospects for the future aren’t alluring; / No one believes Prosperity enduring...*” (*Letters* 354) と次なる戦争の気配が迫っていることを告げている。オーデンは「バイロン卿への手紙」の中で、詩人と大衆の距離に対する問題意識を示しながら、大衆が文化の価値を定めるようになった1930年代社会の姿を映し出した。他方で、詩人と同時代社会との距離という問題については作品中で模索し続けながらも、バイロンに対して結論を語ることはなかった。1930年代社会における自らの在り方を模索しながら、オーデンはイギリス帰国後ほどなくして戦火のスペインへと旅立つ。

主要参考文献

Auden, W. H. and Louis MacNeice. *Letters from Iceland. The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse. Vol. 1: 1926-1938.* Edited by Edward Mendelson. Princeton UP, 1996, pp. 171-380.

---. “Introduction to *The Oxford Book of Light Verse*,” *The Complete Works of W. H. Auden: Prose and Travel Books in Prose and Verse. Vol. 1: 1926-1938.* Edited by Edward Mendelson. Princeton UP, 1996, pp. 430-437.